

センター研究年報2022



京都大学人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究センター

特集 北魏文成帝南巡碑碑陰図釈（藤井律之編）

目 次

解題	1
図版と釈文	巻末 1

北魏文成帝南巡碑碑陰図釈

解 題

北魏の文成帝は、和平二年（461）に中山・鄴・信都などを巡行して首都平城に帰還する途次、靈丘において君臣交えての射撃大会を行った。その内容は矢の飛距離を競うもので、最も矢を飛ばしたのは他ならぬ文成帝であり、そのことを記念して碑を立てたことが、『魏書』高宗紀と『水経注』瀛水にみえる¹。碑が立てられた場所は、山西省靈丘県の県城の東南約15キロの地点である。

この碑は、『太平寰宇記』卷五十一 河東道蔚州靈丘県の条にも見えており、「其碑見存」とあることから、同碑は北宋時代にもまだ立っていたと考えられる³。その後、金石書への著録もなく、また破断してしまっ²たが、1980年代後半から90年代前半に残石が発見された。全ての破片がみつかったわけではなかったが、発見された残石は綴合されて、現在は発見場所にほど近い覺山寺に保存されている⁴。また、碑額から碑の正式名称は「皇帝南巡之頌」と判明した（本稿では文成帝南巡碑と称する）。

文成帝南巡碑の釈文を最初に公表したのは勒生禾と謝鴻喜で、綴合前の残石から採った拓本図版も公表している⁵。ただし、碑陰についてはすべての残石を釈読しているわけではない。残石全ての図版は張慶捷によって公表され、碑陰の判読可能な部分が全て釈読されている⁶。

綴合されたとはいえ、碑の主題を記している碑陽の内容を復元するには不充分であった。その一方、碑陰は碑陽よりも残存面積が広く、行幸に随行した家臣の姓名と官爵を、約200人分判読することができた。文成帝期は孝文帝による漢化政策以前にあたるため、鮮卑語（を漢字で音写した）姓名と、鮮卑語（を漢字で音写した）官職名が多数含まれていた。周知の通り、『魏書』ではそうした鮮卑的要素は意図的に排除されているため、文成帝南巡碑碑陰は、孝文帝期以前における北魏の実態を伝える貴重な史料とみなされ、碑陽の内容が非常に断片的であったこととあいまって、同碑にかんする研究は、ほぼ碑陰に集中することとなった。

碑陰に対する研究は、釈読を行った張慶捷自身のそれを嚆矢とする⁷。日本においては、川本芳昭が張

1 『魏書』卷五 高宗紀

（和平二年）二月辛卯、行幸中山。丙午、至于鄴、遂幸信都。三月、劉駿遣使朝貢。輿駕所過、皆親對高年、問民疾苦。詔民年八十以上、一子不從役。靈丘南有山、高四百餘丈。乃詔群官仰射山峰、無能踰者。帝彎弧發矢、出山三十餘丈、過山南二百二十步、遂刊石勒銘。

『水経注』卷十一 瀛水

瀛水自縣南流入峽、謂之隘門。設隘于峽、以譏禁行旅。歷南山、高峰隱天、深溪埒谷。其水沿澗西轉、逕御射臺南、臺在北阜上、臺南有御射石碑。

2 『太平寰宇記』卷五十一 河東道蔚州靈丘県条

水経注云、靈丘縣有御射臺、臺南有御射碑。即後魏文成帝和平二年南巡於此、路左有山、高七百仞、命群臣射之、不過半。帝乃射之、箭過其頂三十餘仞、落山南三百步、遂刻石。其碑見存、陰刊從臣姓。

3 張鵬飛2015、396～400頁。

4 綴合によって復元された姿は、徳泉さち2017にみえる。

5 勒・謝1995。これに先んじて勒生禾と謝鴻喜は、釈文の一部を公開しているが（勒・謝1994）、図版は公開されていなかった。

6 張・李1997。のちに張慶捷2010に再録されているが、「直勲」が「直勤」に改められている。「直勲」の方が文成帝南巡碑の釈文として適切である。その他、判読不能字（□）の一部が削除されている。

7 張慶捷1998。

慶捷の釈文を紹介して検討を加えているように、釈文も張慶捷のものが基準となっている。⁸

ただ問題なのは、張慶捷の釈文が簡体字を用いていた点、そして文成帝南巡碑は損壊していてもなお巨大であり、張・李1997は碑陰全体の図版を掲載するために一ページを割いてはいるが文字は判読不能で、釈文の是非を検討しようがないという点である。現在、張・李1997は、CNKI から PDF をダウンロードできるが、図版は拡大にたえるものではない。⁹

また、徳泉さち2017は拓本が劉鎮祥1999に掲載されていると指摘しているが、同論文にみえる拓本は「局部原大」のものであり、碑陰は第三列43～49行目、第一列8～14行目のそれぞれ一部に過ぎない。

その他、管見の限りではあるが、文成帝南巡碑の図版を掲載するものとして、三晋2010がある。その碑陰図版は張・李1997に掲載されたものとは異なっているものの、下部が入りきっていない（ちなみに図版の来歴も示されていない）。また図版の大きさは張・李1997よりもやや大きい、それでも文字を判読することは困難である。なお、同書の釈文は、張慶捷のものを機械的に繁体字に変換しただけであった。¹⁰

近年では、インターネット上で画像や釈文を検索できる石刻データベースも充実しており、李小瑞2021は北朝の石刻を検索可能なものを九つ挙げている。それらの名称と筆者による文成帝南巡碑の検索結果をまとめると次のようになる。

「中国歴代石刻資料匯編」…なし。¹¹

「中国金石総録」…なし。¹²

「中華石刻数拠庫・漢魏六朝碑刻」…あり。¹³

「中華石刻数拠庫・三晋石刻大全」…あり。¹⁴

「中国歴代墓誌数拠庫」…なし。¹⁵

「台湾金石拓片資料庫」…なし。¹⁶

「京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料・文字拓本」…なし。¹⁷

「首都図書館北京地方文献中心——北京記憶・燕京金石」…なし。¹⁸

「北京大学数字図書館古文献資料庫・秘籍琳琅」…なし。¹⁹

8 川本芳昭2000。なお、川本芳昭は張・李1997が釈読していない箇所について、自身の知見によって補っている。

9 張・李1997を再録する張慶捷2010では、図版はさらに縮小されており、釈文の検討には役に立たない。

10 たとえば鮮卑語音写の官職である「阿干」は、伝世文献でも石刻でも「阿干」と表記されるが、三晋2010はすべて「阿幹」に変換してしまっている。

11 <https://www.clcn.net.cn/resources/default/detail?id=27>

石刻そのものではなく金石書のデータベースである。

12 <http://www.ch5000.com.cn/>

13 <http://inscription.ancientbooks.cn/docShike/shikeSublibIndex.aspx?libId=4>

なお、中華石刻数拠庫については、大知聖子2021も参照されたい。

14 <http://inscription.ancientbooks.cn/docShike/shikeSublibIndex.aspx?libId=3>

15 <http://csid.zju.edu.cn/tomb/stone>

16 <https://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/Search/Index/5>

17 <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/>

18 <https://www.bjmem.com.cn/#/guest?en=Rubbings&id=5&isDelete=0&status=0&tlevel=2&tname=%E7%87%95%E4%BA%AC%E9%87%91%E7%9F%B3&tparentId=2&type=t2>

19 <http://rbd1.calis.edu.cn/aopac/indexold.jsp>



文成帝南巡碑が収録されているのは「中華石刻数拠庫・漢魏六朝碑刻」と「中華石刻数拠庫・三晋石刻大全」である。以下、「中華石刻数拠庫」について整理している大知聖子²⁰にもとづいて簡介すると、「漢魏六朝碑刻」は、毛遠明の『漢魏六朝碑刻集釈』を底本とする。同書は『漢魏六朝碑刻校注』（線装書局、2008）を増補・改定したものとのことであるが、『漢魏六朝碑刻校注』に文成帝南巡碑は著録されていない。また、「三晋石刻大全」は、さきに挙げた三晋²⁰2010を底本とする。両者とも拓本・原石の画像を掲載しているというが、問題がいくつかある。

まず有料という点である。大知聖子²⁰2021によれば、「漢魏六朝碑刻」は「日本で申し込む場合、同時アクセスが2つまでの海外特別価格は約60万円、同時アクセスを10までに増やすと約100万円かかる」、「三晋石刻大全」は「データベースは海外特別価格で約150万円、同時アクセスが10の場合は約250万円かかる」とのこと、個人で容易に使用できるものではない。²⁰そのため筆者も著録の有無と釈文を確認できただけで、画像を確認することはできなかった。

またその画像についても、大知聖子²⁰2021は「三晋石刻大全以外は画像の拡大縮小・文字の反転を使い細かく文字が見られる機能を備えている」と述べている。つまり、「三晋石刻大全」は画像の拡大ができないことになる。また、三晋²⁰2010の画像がスキャンされているだけだとすれば、釈文を検討する上ではほぼ役に立たない。

問題となるのは「漢魏六朝碑刻」の画像である。釈文には毛遠明の（ものと思われる）注釈が付されているが、釈文自体は管見の限り張・李²⁰1997と同じである。仮に毛遠明が拓本なり鮮明な画像を入手していたのであれば、後述する誤字や釈読漏れを見逃すはずはない。憶測ではあるが、「漢魏六朝碑刻」で閲覧できる画像はさほど鮮明なものではないのではあるまいか。

ともあれ、張慶捷の釈文を検討するためには拓本あるいは鮮明な図版が必要不可欠で、現状ではそれらを確認するすべがほぼ無いわけだが、筆者は幸運にもインターネットオークションにて、碑陰拓本を入手することができた（図1）。出品者によれば、中国人の知り合いから購入したものだということで、それ以上の情報を得ることができなかった。筆者が入手した拓本は裏打ちされているため、凹凸を確かめることができなかったが、印刷物ではなく拓本であることは確かだと思われる。碑額最上部まで採拓されていないが、筆者の測定によれば拓本の高さは約212cm、碑額の幅約140cmで、碑身の幅はそれよりやや狭い。

20 両者とも2020年6月時点における亜東書店の調べによるものとのことである。なお、「中華石刻数拠庫・漢魏六朝碑刻」については、東京大学が使用契約を結んでいる。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/database/309>

图1 筆者所藏拓本





文成帝南巡碑と同様の巡行碑を、文成帝の祖父にあたる太武帝も立てている。太武帝による「皇帝東巡之碑」、いわゆる太武帝東巡碑は二十世紀はじめに発見されたが、その後原石は行方不明となり、碑陽拓本のみ伝わる。太武帝東巡碑の拓本サイズは、北図1989によれば高さ181cm、幅77cm、京都大学人文科学研究所が所蔵する拓本を筆者が実測したところによれば高さ約190cm、幅約89cmと、測定者によってサイズがまちまちなのではあるが、太武帝東巡碑よりも文成帝南巡碑の方が格段に大きかったことは確かである。

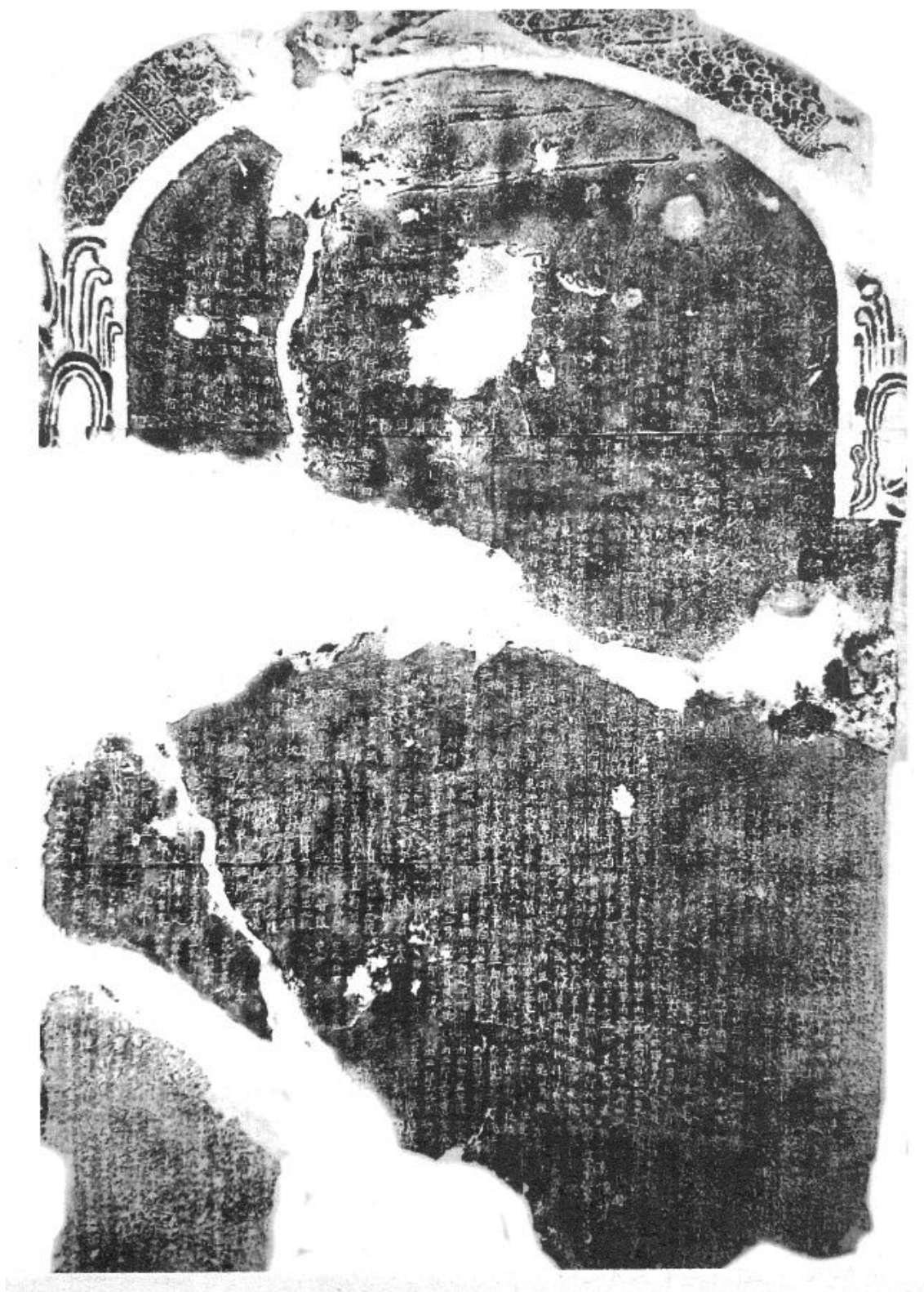
筆者の所蔵拓本は、張・李1997の図版（図2）よりも三晋2010の図版（図3）に近い。張・李1997図版との大きな相違は、張・李1997が「另有一小块残碑」とするものが、張・李1997では左下に配置されているのに対して、筆者所蔵拓本は二列目の破断部分に配されている点である（なおこの「小块残碑」は、三晋2010では採拓されていない）。また、張・李1997にて「小块残碑」のすぐ右に置かれている石塊の位置も異なっている。張・李1997では、下部中央やや左に配置され、第五列・第六列・第七列として処理・釈読されている。それに対し筆者所蔵拓本は、張・李1997に比して左上に配されており（三晋2010も同じ）、第四列と綴合できるかのような位置に置かれている。

圖2 張·李1997掲載図版





图3 三晋2010掲載図版



三晋2010は筆者所蔵拓本よりも剥落箇所が多いので、おそらく張・李1997の図版は綴合前の拓本であり、綴合後に筆者所蔵拓本が採られ、さらにその後に三晋2010の拓本が採られたと考えられるが、前述の石塊について、張・李1997が第五列・第六列・第七列と判断した理由、ならびに筆者所蔵拓本において第四列近くに配置された理由は不明であり、内容から正確な位置を復元することも困難である。よって本稿では、独立した石塊として処理・釈読する。

石塊の配置以外に釈読の問題もある。筆者所蔵拓本にしたがって張・李1997の釈文を検討すると、明白な誤釈として、第一列21行を挙げることができる。張・李1997は

□□□□□□□ [陽] 男吐難子如割

と釈読するが、これは

……………陽男吐難於如割

と釈読すべきである。「於」字が簡体字の「于」に改められ、それが「子」と誤植されたのではないかとと思われる。また、第二列19行を張・李1997は

侍中尚书左仆射安南将军□□□平昌公素和其奴

と釈読する²¹が、これは

侍中尚書左僕射安南將軍□ □少傅羽真平昌公素和其奴

と釈読すべきで、「少傅羽真」の四字の釈読を漏らしている。これら以外にも、瑣末ながら異同をいくつか見つけることができた。外的史料批判が不十分ながら、筆者所蔵拓本の図版とそれにもとづく釈文を公開しようと考えた所以である。

張・李1997の釈文にはもう一つ問題があって、それは、判読不能部分の字数を明記していることである。文成帝南巡碑の碑陽は、(写真を見る限り)罫線は引かれていないものの、文字は上下左右均等に配置されている。しかし碑陰は、罫線によって各列・各行の区分はなされているものの、各行の文字の配置には疎密があって不揃いとなっている。また破断箇所もあるため、判読不能部分の字数を正確に示すことは不可能である。また、張・李1997の釈文には、碑陰第二列の冒頭に「残93字」とある。第二列中の一行に93文字も記されていることはありえず、途中で改行されていることは明白なのだが、具体的な字数を挙げている割には改行箇所が示されていない。よって、筆者が提示する釈文においては、判読不能部分について、確実に字数が判明する箇所以外は、字数不明として処理してある。

ちなみに、改行箇所に関する誤りもある。張・李1997は「丿」によって改行を示すが、第三列28行以降を

21 張慶捷2010では、

侍中尚书左仆射安南将军平昌公素和其奴
となっていて、中間の判読不能字三字分が削除されている。



武毅將軍内三郎斛律莫烈¹ 内三郎高长城¹ 内三郎其连受洛拔¹ 内三郎独孤¹

としている。しかし拓本によって確認すると、

武毅將軍内三郎斛^断莫^口 内三郎^高长城
内三郎其連受洛拔 内三郎獨^孤勅^口

と、一行に二名配列されている。

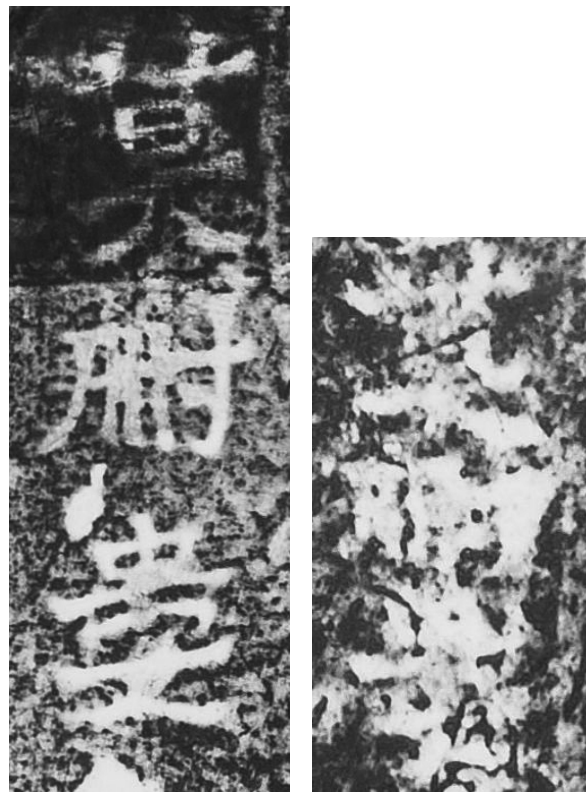
文成帝南巡碑は、北朝石刻の例に漏れず異体字が多い。その中でも特異なのが、図4に示した字である。この字は第一列39行および第三列25行にみえ、後者はやや剥落しているが同じ字と考えられる。しかしながら、張・李1997は前者を「耐」、後者を「那」と釈している。この字は二つとも「莫」字と「婁」字の間に用いられており（図5）、張・李1997に従えば「莫耐婁」あるいは「莫那婁」ということになるが、これは胡族の三字姓である。胡姓には石刻や典籍の間における同音異訳はありえるが、特定の石刻において同じ字形のものが同一の姓の中で用いられているのに、それを二通りに釈読するのは不適切と言わざるを得ない。

図4



上が第一列39行、下が第三列25行のもの

図5



ただこの「莫耐婁」なり「莫那婁」には厄介な問題があって、以下に示すように、『魏書』をはじめとする伝世文献においても表記が一定していないのである。

『魏書』…莫²²那婁

『北齊書』『周書』…莫²³多婁

「莫耐婁」「莫那婁」だけではなく、「莫多婁」という表記もあったことになる。

この表記のゆれについては先行研究の言及がある。陳毅『魏書官氏志疏証』は、『魏書』官氏志の「莫那婁」を是とした上で次のように述べる。

又通志有莫多婁氏、亦云「代人、隨魏遷洛陽」。「多」・「那」同聲、即莫那婁也。據『爾雅』釋詁「那多」、釋文「那」本作「𪛗」。又『姓氏辯證』二十八莫氏下稱、「河南改莫氏者、有魏莫多婁氏」。蓋志本作「𪛗」、後因形聲相近、遂無定字。

『爾雅』釋詁に「那」を「𪛗」に作るテキストがあるという『經典釋文』の説を根拠として、²⁴『魏書』官氏志の本来の表記は「莫𪛗婁」であり、字形や音の近似によって、「莫那婁」あるいは「莫多婁」と表記が不定となった、とする。

一方、姚薇元は『北朝胡姓考』²⁵において、次のように述べている。

按「多」乃「那」之誤。「多」「那」古書頗似、音又疊韻、故訛。孝文弔比干文碑陰有「監御令臣河南郡莫耐婁悦」。「那」・「耐」雙聲字、「莫耐婁」殆亦「莫那婁」之異譯。此可藉證莫多婁之「多」、為「那」之訛；因「耐」與「那」為雙聲、而「耐」與「多」則聲韻均殊也。

こちらの説によれば、本来の表記は「莫那婁」であり、「那」と「耐」が双声であることから、「莫耐婁」と異訳することもあった。しかし、「莫多婁」に作るのは字形の類似による誤り、ということになる。

両者とも「那」に音が近いという点を論拠としているのに異なる結論に達しているのは、「那」には「乃河反」と「奴多反」の二つの音があるからで、前者に音が近いと解すれば「莫那婁」が「莫耐婁」になるし、後者に近いとすれば「莫多婁」となるわけである。

このように、先行研究でも意見が分かれているわけだが、陳毅・姚薇元両者の説に共通する「莫那婁」から検討してみると、この拓本から確実に言えるのは、図4の字が「那」でないことである。「那」は第二列40行に見えており（図6）、²⁶これは北魏以外でもよく用いられた字形であって、問題の図4の字とは明らかに異なる。

22 『魏書』卷百十三 官氏志

莫那婁氏、後改爲莫氏。

23 『北齊書』卷十九 莫多婁貸文伝

莫多婁貸文、太安狄那人也。

『周書』卷二 文帝紀下

（大統四年）八月庚寅、太祖至穀城、莫多婁貸文・可朱渾元來逆、臨陣斬貸文、元單騎遁免、悉虜其衆送弘農。

24 『經典釋文』卷二十九 爾雅音義上・釋詁

那、奴多反。本或作𪛗。

25 『北朝胡姓考』は、2007年に中華書局が出版した修訂本を用いた。

26 第二列40行に、

𪛗男胡莫那

とある。



図6 那



そうすると「莫耐婁」か「莫多婁」か、ということになるわけだが、注目したいのは姚薇元が「孝文弔比干文碑陰有『監御令臣河南郡莫耐婁悦』」と述べている点である。「孝文弔比干文碑（皇帝弔殷比干文）」は、孝文帝が太和十八年（494）に立てたものであるが、原碑は失われ、北宋元祐五年（1090）に、呉处厚が拓本より模刻したものが伝わる。今回は台湾の中央研究院が所蔵する拓本を閲覧することができた。それによれば、姚薇元が指摘するように、明らかに「耐」字が用いられている（図7²⁷）。なお、この拓本では第一列一行目の「驃」字が、北朝時代の異体字である「驃」²⁸（図8）となっているので、異体字を正字に改めるようなことはしておらず、原碑の拓本を正確に模刻していると思われる。

図7 莫耐婁



図8 孝文弔比干文碑にみえる「驃」字



※中央研究院歴史語言研究所所蔵拓本画像より引用。

※中央研究院歴史語言研究所所蔵拓本画像より引用。

よって、図4の字は「耐」と釈したいところではあるのだが、若干の問題がある。まず、図4の字形が「耐」の異体字として見当たらないという点である。²⁹

もう一つの問題は、「莫多婁」姓の墓誌が出土しているという点である（図9）。その墓誌は、2015年に陝西省咸陽市から出土した北周武成元年のもので、墓主は「莫多婁太夫人」³⁰であった。周知の通り、胡姓は北魏孝文帝の漢化政策によって漢姓に改められたが、西魏の恭帝元年（554）に虜姓が再行され、

27 第三列3行目にみえる。

28 第一列1行目に

使持節驃騎大將軍都督司豫荆郢洛東荆六州諸軍事開府司州牧咸陽王臣河南郡元禧とある。

29 1410点の石刻にもとづいて作成したとする毛遠明2014において、そもそも「耐」の異体字自体が収録されていない。

30 墓誌の題は「魏故使持節車騎大將軍儀同三司燕恒朔三州諸軍事恒州刺史去斤鍾馗妻金大明郡君莫多婁太夫人墓誌」。陝西2019所収。

隋によって廃止されるまで続いた。この墓誌は虜姓再行期のものである。ただ、虜姓が再行されたのは、孝文帝の死から半世紀以上経過して後のことなので、正しく胡姓が伝わらなかったと説明できなくはないけれども、「莫耐婁」がなぜ「莫多婁」になってしまったのか、という別の問題が生じる。

図9 莫多婁



ここで想起したいのは、『魏書』官氏志の本来の表記は「莫耐婁」であったという陳毅の説である。あらためて図4の字を見てみると、右側が「寸」なのは確実だが、左側は「多」のように見えなくも無い。本来は「那」の異体字である「𠂔」が、さらに北魏独自の異体字として「𠂔」と表記されるようになったのではあるまいか。それが孝文帝期には「耐」と表記されるようになり、虜姓再行期には「𠂔」あるいは「𠂔」という字形にもとづいて「多」と表記されるようになった、と一応説明できなくはない。ただ、これはあくまで筆者の憶測に過ぎないし、音韻学的な裏付けが全くない。よって、本稿では「孝文弔比干文碑」にしたがって図4の字を「耐」と釈読し、新資料の追加を俟つこととしたい。

筆者が拓本にもとづいて釈読した際、張・李1997の釈文を確認できない部分が多くあった。三晋2010の図版とあわせて考えると、これは出土から半世紀も経っていないにもかかわらず、原碑が損耗し続けていることを示している。文成帝南巡碑は、北魏史研究の第一級史料であり、適切に保護されること、あわせて、初拓の鮮明な図版が公表されることを切に望む。

現在は、猖獗極めるコロナウィルスによって、原碑を調査しに行くことも叶わないし、現地を訪問出来たとしても、巨大な拓本を携えて外的史料批判を行うこと自体甚だ困難である。この図版をご覧になった方々が、異日、訪中して原石あるいは善拓を調査し、筆者の釈読をご検討いただければ幸甚である。

最後に、「孝文弔比干文碑（皇帝弔殷比干文）」拓本画像の利用を許可していただいた中央研究院、ならびに筆者所蔵拓本を撮影していただいた清水光芸社および同社の渡邊裕介氏、また筆者の無茶な要望にに応じていただいた共同印刷工業および同社の東滝生氏に感謝申し上げます。

本稿は JSPS 科学研究費補助金基盤研究 B「中国古代軍事史の多角的検討—「公認された暴力」のありか」（研究代表者：宮宅潔、課題番号19H01318）による研究成果の一部である。



参考文献

大知聖子2021…「中国・石刻史料のデータベース紹介」、『人文情報学月報』第107号、2021。

<https://www.dhii.jp/DHM/dhm107>

川本芳昭2000…「北魏文成帝南巡碑について」、『九州大学東洋史論集』28、2000。のち、同氏『東アジア古代における諸民族と国家』（汲古書院、2015）第一編第二章所収。

徳泉さち2017…「北魏平城時代の巡行碑」、『書学書道史研究』27、2017。

北図1989…北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編 第三冊 北朝』、中州古籍出版社、1989。

勒・謝1994…勒生禾・謝鴻喜「北魏〈皇帝南巡之頌〉碑考察報告」、『山西大学学报 哲学社会版』1994-2。

勒・謝1995…勒生禾・謝鴻喜「北魏〈皇帝南巡之頌〉碑考察清理報告」、『文物季刊』1995-3。

李小瑞2021…「近二十年北朝碑刻整理研究回顧与展望」、『北朝研究』13、2021。

劉鎮祥1999…「關於北魏《皇帝南巡之碑》碑的書法」、『書法叢刊』1999-1。

毛遠明2014…『漢魏六朝碑刻異体字典』、中華書局、2014。

三晋2010…高鳳山主編『三晋石刻大全・大同市靈丘県卷』、山西出版集团、2010。

陝西2019…『陝西省考古研究院新入藏墓志』、上海古籍出版社、2019。

張鵬飛2015…『《水經注》石刻文献叢考』、社会科学文献出版社、2015。

張・李1997…張慶捷・李彪「山西靈丘北魏文成帝南巡碑」、『文物』1997-12。

張慶捷1998…「北魏文成帝〈南巡碑〉碑文考証」、『考古』1998-4。

張慶捷2010…「北魏文成帝《皇帝南巡碑》の内涵与価値」、同氏『民族匯聚与文明互動——北朝社会的考古学觀察』商務印書館、2010。

図版と釈文

凡例

以下に、碑陰図版と対応する釈文を示す。

張・李 1997 が第五列に綴合している石塊については、切り離して石塊第一列～第三列として釈読する。

筆者所蔵拓本で判読可能な箇所について、張・李 1997 との異同を挙げる。

他の記号の意味については以下の通り。

□字…残画から推測した文字。

□…一字不明。

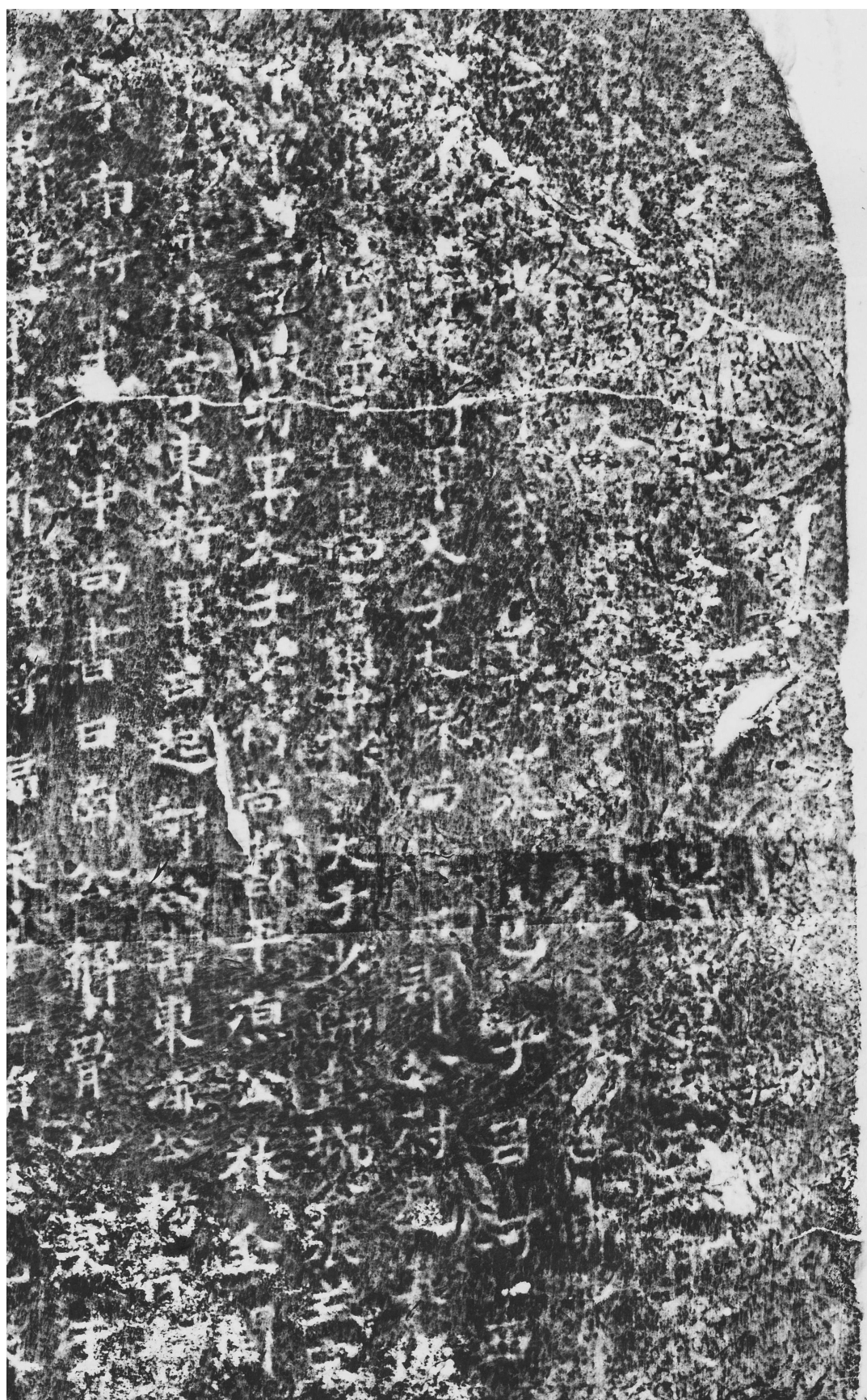
…字数不明。

□…破断箇所。

石刻の図版は、石塊第一列から第三列までは約43パーセント、その他については約56パーセントのサイズに縮小してある。



08 07 06 05 04 03 02 01



第一列

- 01 侍中撫軍大將軍太子太傅司徒公平原王步六孤伊□
- 02 侍中特進車騎大將軍□太子太保尚書太□王¹一弗步□□
- 03 一□□將軍□羽真襄邑子呂河一西²
- 04 中常侍寧東將軍太子太保尚書西郡公尉遲其地
- 05 中常侍寧西將軍儀曹尚書領中秘書太子少師彭城公張益宗
- 06 中常侍寧南將軍太子少傅尚書平涼公林金閭
- 07 散騎常侍寧東將軍西起部尚書東海公楊保年³
- 08 寧南將軍殿中尚書日南公斛骨乙莫干³

- 1 あるいは「乙」か。
- 2 張・李 1997 は「一」を「六」とする。
- 3 張・李 1997 は「日」を「日」とする。



18 17 16 15 14 13 12 11 10 09





- 09 左衛將軍内都幢將福祿子乙旃惠也拔
- 10 寧□將軍宰官内阿干魏昌男代伏云右于尼⁴
- 11 左衛將軍内阿干太子左衛帥安吳子乙旃阿奴
- 12 □□□軍太子庶子内阿干晉安男蓋婁太拔
- 13 揚烈將軍内阿干陰陵男社利幡乃婁
- 14 安北將軍内阿干東平公是婁勅万斯⁵
- 15 □□□軍内阿干建安男尉遲沓亦干
- 16 中常□寧南將軍太子率更令内阿干南陽公張天度
- 17 ……侍寧南將軍……太子家令平陽公賈愛仁
- 18 □内阿干嘉寧男若干若周

4 張・李 1997 は「于」を「子」とする。

5 あるいは「期」か、



28 27 26 25 24 23 22 21 20 19





9	8	7	6	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
張・李 1997 は「畢」を「平」とする。	あるいは「乙」か。	張・李 1997 は「於」を「子」とする。	張・李 1997 は「退明」を「忍所」とする。	寧朔將軍内行令永平子胡墨田	内行内三郎段魚陽	内行内三郎高畢國 ⁹	庫部内阿 ⁹ 庫蘭	中堅將軍 ⁹	寧 ⁹ 寧 ⁹ 陽子韓天愛	江乘男 ⁸ 弗阿伏真	陽男吐難於如剗 ⁷	普陵	拔退明 ⁶



38 37 36 35 34 33 32 31 30 29





12 11 10
あるいは「威」か。
張・李 1997 は「段」を「挟」とする。
あるいは「周」か。

38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
内行内小同¹²各拔
内行内小吐伏盧大引
内行内小衛道温
内行内小高¹¹各拔
内行内小段庫¹¹莫
内行¹¹
内行内小伊…
内行内小馬…
内行内小叱羅騏
内行内小乙旃俟
内行内小呂愛
内行内小賀¹⁰去
内行内小賀¹⁰
和莫各豆
内行内小…
内行内小…
内行内小…
廣威將軍建德子内行内小賀若貸別



42 41 40 39





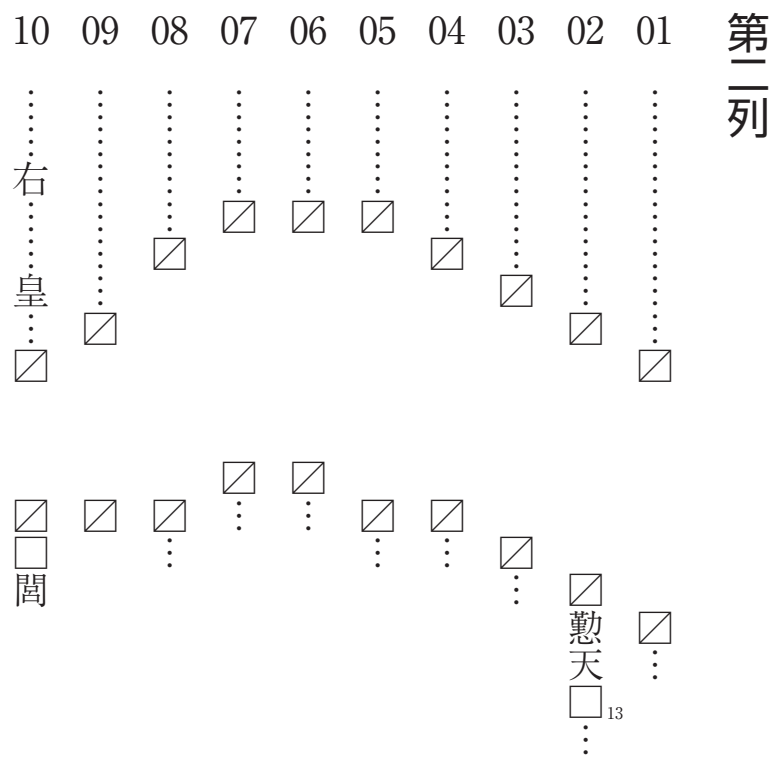
- | | |
|----|----------------|
| 42 | 右五十一人内侍之官 |
| 41 | 内行令直勲侯六孤 |
| 40 | 鷹揚將軍内行令蔡陽男宿六斤阿 |
| 39 | 内行内小韓生 内行内小莫耐婁 |



10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



13 張・李 197 は三行目に配する。





20 19 18 17 16 15 14 13 12 11



20 19 18 17 16 15 14 13 12 11

- | | | |
|----|-------------|----------------------------|
| 11 | 衛大將軍樂安王 | 何良 |
| 12 | 平東將軍□□王直 | 大汗 |
| 13 | 征西將軍常山王 | 連戊 |
| 14 | 散騎常侍征東將軍光祿 | 中山□杜豐 |
| 15 | 散騎常侍平西將軍駕部 | 陽公□陵□婆 |
| 16 | 征東大將軍駙馬都尉 | 郡王茹茹常友 ¹⁴ |
| 17 | 散騎常侍龍驤將軍 | 陽公素和勅侯陵 ¹⁵ |
| 18 | 侍中安南大將軍殿中尚書 | 安王獨孤侯尼須 |
| 19 | 侍中尚書左僕射安南將軍 | 少傅羽真 ¹⁶ 平昌公素和其奴 |
| 20 | 平東將軍選部尚 | 陽樂侯常伯夫 |

- | | |
|----|---------------------------|
| 14 | あるいは「虎」か。 |
| 15 | 張・李 1997 は「陵」を「佚」とする。 |
| 16 | 張・李 1997 は「少傅羽真」を釈読していない。 |



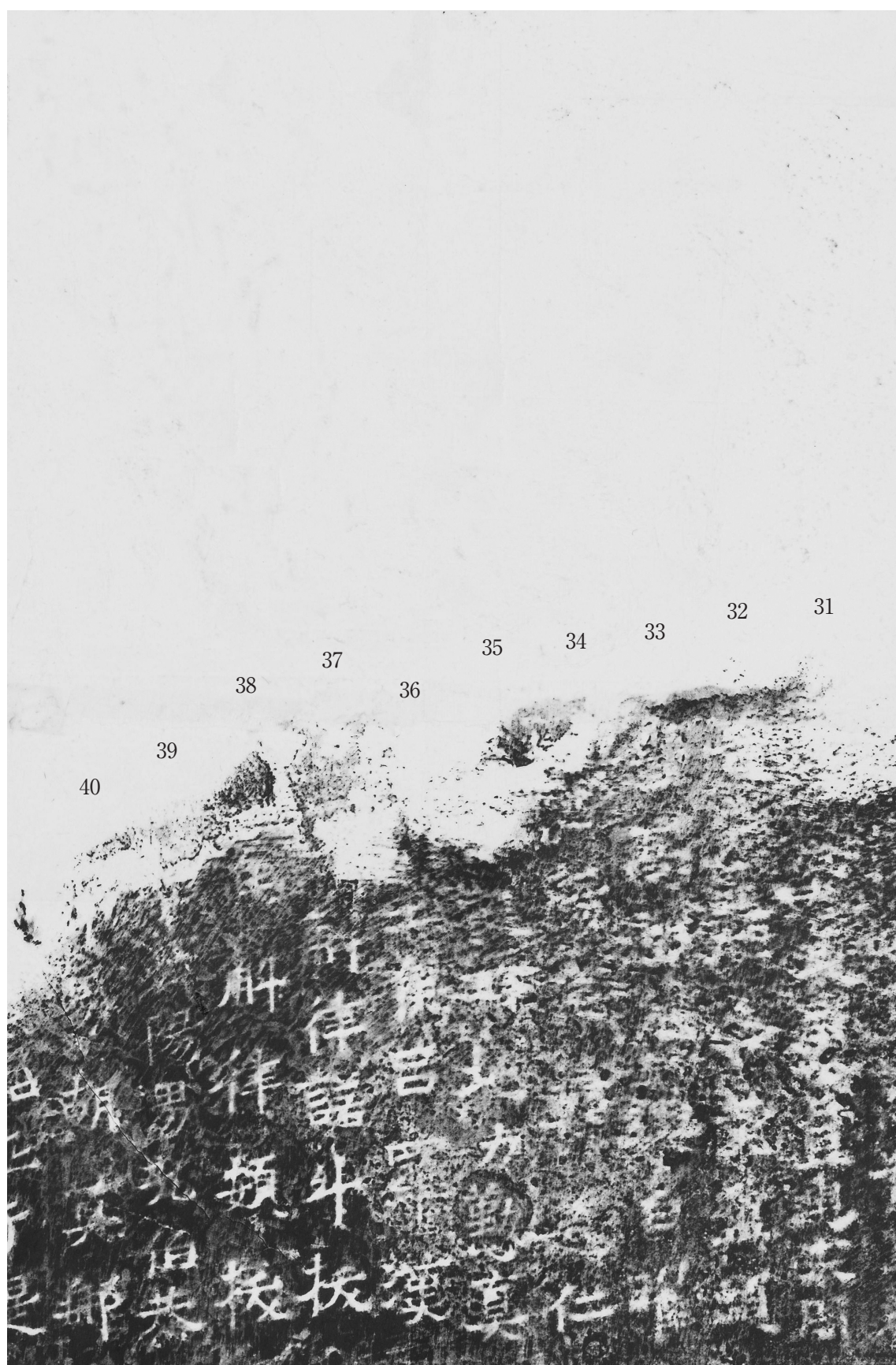
30 29 28 27 26 25 24 23 22 21



30 29 28 27 26 25 24 23 22 21

18 張・李 1997 は「師」を「衛」とする。
17 張・李 1997 は「直」を「宜」とする。

- 21 散騎常侍安南將軍 ☒ ☐羽真南郡公毛法仁
- 22 武衛將軍 ☒ ☐城子比子乙得
- 23 散騎常侍 ☒ ☐部尚書丹陽公 ☐真師¹⁷
- 24 寧東 ☒ ☐胡優婆 ☐阤
- 25 散騎常 ☒ ☐安複侯拔拔侯頭
- 26 散騎常 ☒ ☐：曹尚書扶風公李真奴
- 27 散騎 ☒ ☐書汝南公袁紇尉斛
- 28 散 ☒ ☐書 ☐平侯直勲渴侯¹⁸
- 29 寧 ☒ ☐：興侯熱阿久仁
- 30 ☒ ☐陽公直勲郁豆眷



20	19	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
あるいは「梁」、もしくは「迴」か。張・李1997は「慕容」とする。	張・李1997は「口」を釈読していない。	☒ 男胡莫那	☒ 陽男孔伯恭	☒ 侯斛律頰拔	☒ 斛律諾斗拔	☒ 王侯呂羅漢	☒ 地力懃真	☒ 陽侯韓仁	☒ 書高公 ²⁰ 白曜	☒ 公 ²⁰ 黃盧頭	☒ 尚書長 ¹⁹ 廣公 ¹⁹ 豆連求周



21
あるいは「勤」か。

47 46 45 44 43 42 41

☐
∴

☐
兕

☐
乾

☐
天愛

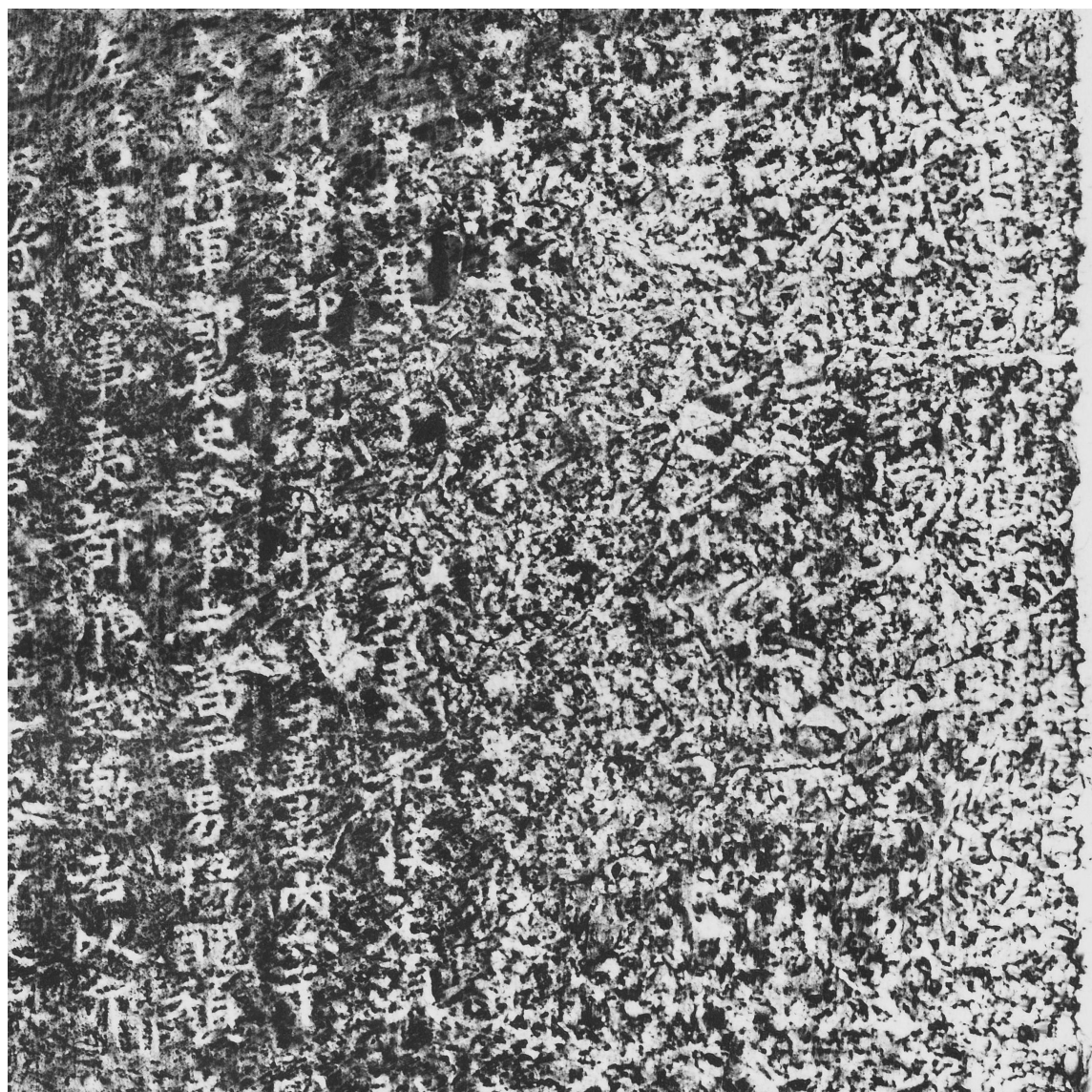
☐₂₁
勤倍斤

☐
右以斤

☐
素和匹于堤



10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



第三列

- 01 中堅將軍内三郎幢將……………
- 02 折衝將軍内三郎……………
- 03 ……内三郎幢將……………
- 04 □將軍……………
- 05 ……………
- 06 鷹揚將軍……………婁
- 07 中壘將軍……………素和使疋須²²
- 08 寧朔將軍都長史給事中…子蓋婁内亦干
- 09 威遠將軍都長史給事中高平男揚醜頽
- 10 左將軍給事夷都□越勲右以斤

22 張・李 1997 は「疋」を「若」とする。



20 19 18 17 16 15 14 13 12 11



28 張・李 1997 は「湮湮子孤」を「□惕乙式」とする。
27 張・李 1997 は「運」を「馳」とする。
26 張・李 1997 は「曹」を「書」とする。
25 張・李 1997 は「盧」を「翼」とする。
24 張・李 1997 は「笥仁」を「進蒙」とする。
23 張・李 1997 は「湮湮子孤」を「□惕乙式」とする。

20 鷹揚將軍給事運²⁷□男楊惠福²⁸
19 驍騎將軍給事武安子任玄通
18 驍騎將軍給事新安子趙騰
17 綏遠將軍中曹給事李阿思²⁶
16 □□軍給事壽張子胡盧²⁵□吉智
15 振武將軍殿中給事□□子□□烏地干
14 右軍將軍殿中給事長寧子丘目陵□□□
13 寧遠將軍駕部給事……子尉遲笥仁²⁴
12 右衛將軍駕部給事湮湮子孤小²³
11 鷹揚將軍太官給事□容男吳□



30 29 28 27 26 25 24 23 22 21





- 29

張・李 1997 は「啓」を「他」とする。
- 30

張・李 1997 は「州」を「樹」とする。
- 31

張・李 1997 は「歩」を「出」とする。
- 32

あるいは「穂」か。
- 33

張・李 1997 は「直」を「真」とする。
- 34

張・李 1997 は「耐」を「那」とする。
- 21

折衝將軍給事南□男胡比啓²⁹紇
- 22

東鉀杖庫給事拔列蘭真州³⁰
- 23

宣威將軍殿中給事步³¹大汗□德³²
- 24

驍騎將軍殿中給事武原子屋引丘直³³□
- 25

驍騎將軍殿中給事新安子莫耐婁愛仁³⁴
- 26

□威將軍内三郎斛骨□羯
- 27

輕車將軍内三郎泰昌男趙三月
- 28

武毅將軍内三郎斛斯莫□内三郎高長城
- 29

内三郎其連受洛拔内三郎獨孤勅□
- 30

宣威將軍典弩庫内三郎拔烈蘭黃頭



40 39 38 37 36 35 34 33 32 31





35

あるいは「逕」か。

- 31 前將軍内三郎鐘離侯斛律羽都居
- 32 明威將軍斛洛真軍將内三郎万忸于忿提
- 33 □威將軍内三郎永寧子直勲苟黄
- 34 後軍將軍内三郎遂安子直勲烏地延³⁵
- 35 明威將軍内三郎殷普陵
- 36 寧朔將軍内三郎晉安子斛律出六拔
- 37 折衝將軍内三郎沙渠男獨孤去頽
- 38 厲威將軍内三郎達奚屈居陵
- 39 厲威將軍内三郎封平呉
- 40 厲威將軍内三郎三次

50 49 48 47 46 45 44 43 42 41



43 42 41

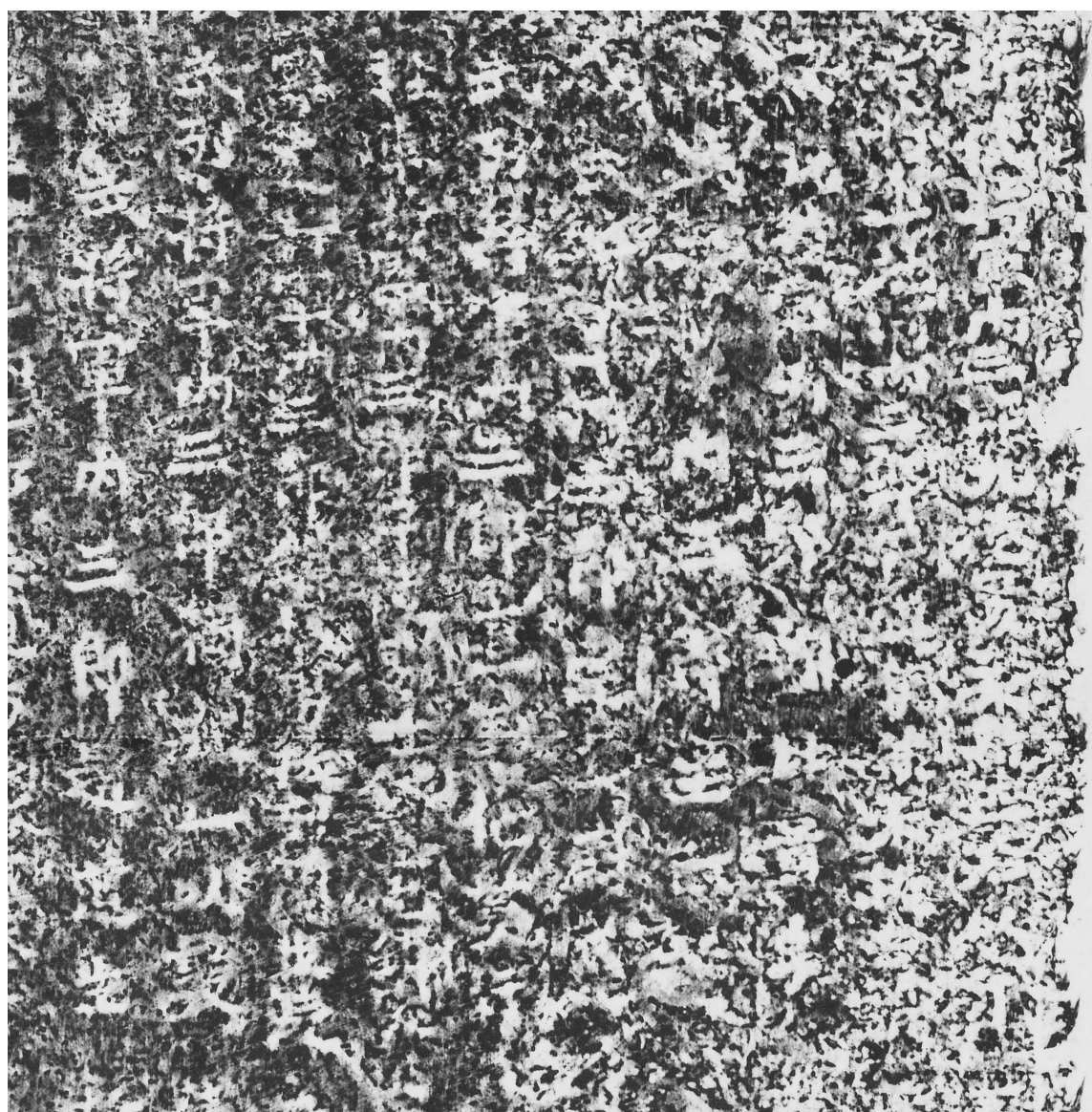


37 張・李 1997 は「屯」を「毛」とする。
36 張・李 1997 は「屯」を「毛」とする。

- 41 威烈將軍内三郎：長命
- 42 伏波將軍内三郎比陽男達奚庫勾
- 43 威寇將軍内三郎契胡庫力延
- 44 威寇將軍内三郎蓋屯³⁶万言真
- 45 内三郎直勲烏地干
- 46 威寇將軍内三郎直勲解愁
- 47 威虜將軍賀渾吐略渥和稽乞魚提
- 48 威戎將軍内三郎獨孤他突³⁷
- 49 威將軍内三郎素和具文
- 50 威將軍内三郎步六孤步斗官



10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



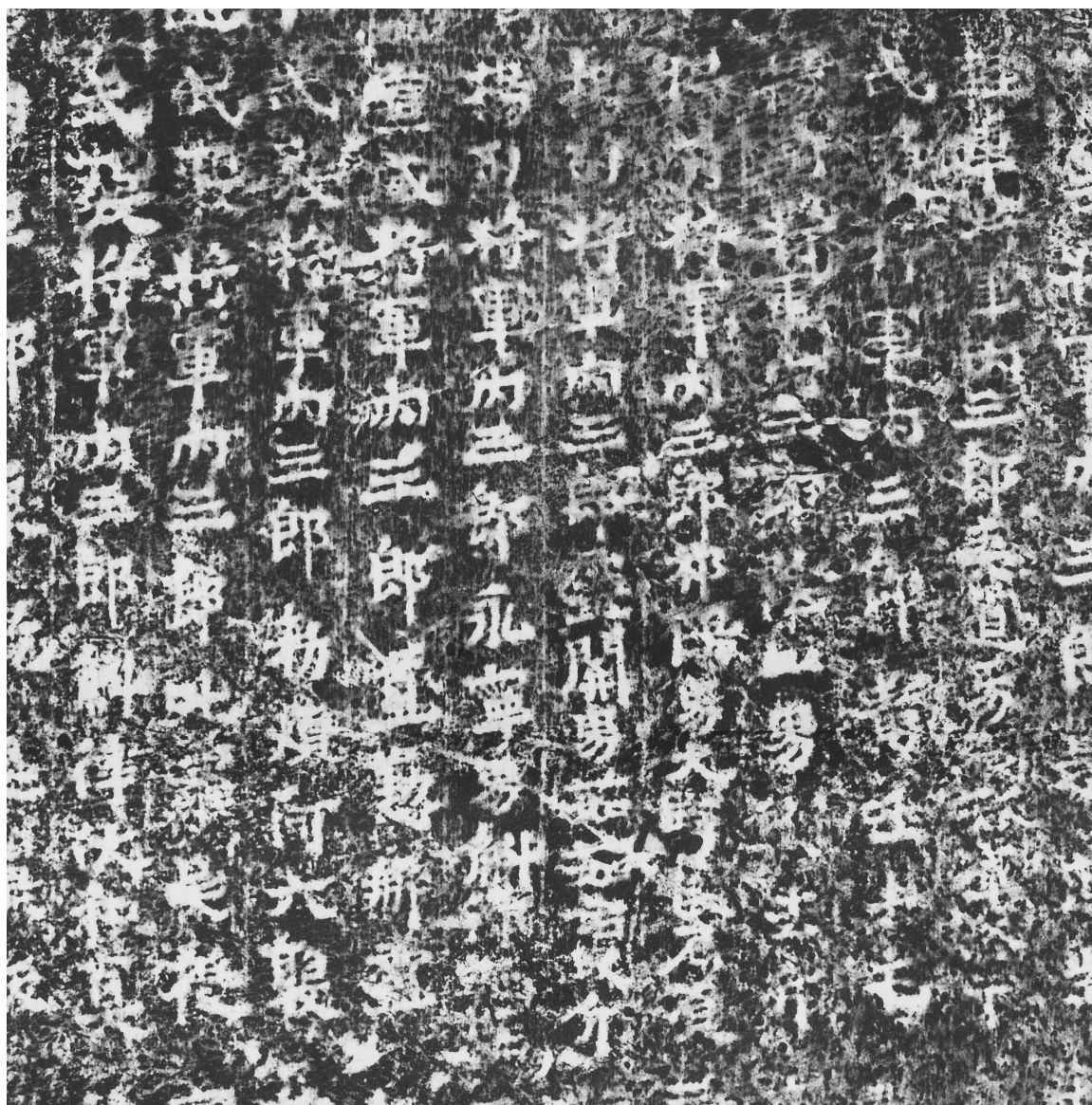
第四列

- 01 折衝將軍内三郎九³⁸德男永□匹□以斤
- 02 右將軍…内三郎… ……拔□□
- 03 □北將軍内三郎□比□□
- 04 ……内三郎王□□
- 05 □□將軍内三郎……尉…
- 06 武烈將軍内三郎直勲他³⁹莫汗
- 07 輕車將軍内三郎……男吐伏…
- 08 寧遠將軍内三郎□陵男拔⁴⁰烈……歩長
- 09 武烈將軍内三郎獨孤乙以愛
- 10 奮武將軍内三郎趙道生

- 38 張・李 1997 は「九」を「北」とする。
- 39 張・李 1997 は「汗」を「行」とする。
- 40 張・李 1997 は「長」を「愛」とする。



20 19 18 17 16 15 14 13 12 11



46	張・李 1997 は「那」を「斛」とする。	41	張・李 1997 は「吐」を「壬」とする。
45	張・李 1997 は「栖」を「西」とする。	40	張・李 1997 は「屯」を「右」とする。
44	張・李 1997 は「右」を「命」とする。	39	張・李 1997 は「頁」を「頂」とする。
43	張・李 1997 は「頁」を「頂」とする。	38	武毅將軍内三郎勅煩阿六敦
42	張・李 1997 は「屯」を「右」とする。	37	武毅將軍内三郎叱羅呉提
41	張・李 1997 は「吐」を「壬」とする。	36	武毅將軍内三郎斛律伏和真
40	張・李 1997 は「屯」を「右」とする。	35	宣威將軍内三郎直懃那盧 ⁴⁶
39	張・李 1997 は「頁」を「頂」とする。	34	揚烈將軍内三郎永寧男斛律娑婁 ⁴⁵
38	武毅將軍内三郎勅煩阿六敦	33	揚烈將軍内三郎靈開男茹茹右以斤 ⁴⁴
37	武毅將軍内三郎叱羅呉提	32	揚烈將軍内三郎祁陽男大野 ⁴³
36	武毅將軍内三郎斛律伏和真	31	揚烈將軍内三郎陰山男 ⁴²
35	宣威將軍内三郎直懃那盧 ⁴⁶	30	武毅將軍内三郎都吐去屯 ⁴¹
34	揚烈將軍内三郎永寧男斛律娑婁 ⁴⁵	29	輕車將軍内三郎夾道男獨孤 ⁴⁰
33	揚烈將軍内三郎靈開男茹茹右以斤 ⁴⁴	28	洛干
32	揚烈將軍内三郎祁陽男大野 ⁴³	27	
31	揚烈將軍内三郎陰山男 ⁴²	26	
30	武毅將軍内三郎都吐去屯 ⁴¹	25	
29	輕車將軍内三郎夾道男獨孤 ⁴⁰	24	
28	洛干	23	
27		22	
26		21	
25		20	
24		19	
23		18	
22		17	
21		16	
20		15	
19		14	
18		13	
17		12	
16		11	
15		10	
14		9	
13		8	
12		7	
11		6	
10		5	
9		4	
8		3	
7		2	
6		1	



30 29 28 27 26 25 24 23 22 21





- 21 内三郎袁紇退賀拔
- 22 内三郎侯莫陳烏孤 内三郎契[胡]烏已
- 23 内三郎折枋俠提 内三郎素和斛万提⁴⁷
- 24 内三郎怡呉提 内三郎[奚]斗孤[] []
- 25 内三郎直勲阿各拔 内三郎直勲求豆眷⁴⁸
- 26 内三郎叱干幡引 内三郎孟菩薩
- 27 内三郎丘目陵呉提 内三郎王右右引
- 28 内三郎張僕蘭 内三郎王洛生
- 29 [鷹揚將] [] 北部折[紇]真賀[] 男泣利儻但
- 30 左衛將軍南部折[紇]真平棘子李敷

- 47 張・李 1997 は「万」を釈読していない。
- 48 張・李 1997 は「求」を「来」とする。



40 39 38 37 36 35 34 33 32 31





- 31 宣□將軍主客折紇真俟文出六于
- 32 建威……………紇真建德子獨孤平城
- 33 遊擊將……………坐折紇真曲梁子叱奴□□
- 34 宣威將軍折紇真直懃□
- 35 中都坐折紇真□
- 36 外都坐折紇真□
- 37 宣威將□□
- 38 賀渾吐略渥庫□
- 39 征虜將軍令方興侯□
- 40 中堅將軍庫部内小幢□



50 49 48 47 46 45 44 43 42 41



50	49
張・李	張・李
1997	1997
は	は
「雅」	「武」
を	を
「躰」	「威」
とする。	とする。

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
☐	中壘	威	奮	太	鷹揚將	前軍將	中堅將軍	宣威將軍内	揚武將軍内小
	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
							雅		49
							50		



10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



第五列

01
建威將軍……………
□

02
建威將軍⁵²
……
三郎
……
□

03
三郎
.....


04
⋮
□

05
⋮
□

06
⋮
三郎
⋮
□

07
宣威將軍三郎幢
…
◻

08
三郎
幢
⋮
□

09 陵江將軍三郎
……


10 折衝將軍三郎幢…

52	張・李1997は「建」を「宣」とする。
51	張・李1997は「建」を「宣」とする。



56	張・李 1997 は「郁」を「木」とする。	20	後軍將軍雅樂真幢將□□子□□
55	張・李 1997 は「豆」を「思」とする。	19	宣威將軍雅樂真幢將直勲郁 ⁵⁶ □□
54	張・李 1997 は「是賁」を「堂賓」とする。	18	前軍將軍雅樂□幢將……………豆 ⁵⁵ □
53	張・李 1997 は「鷹揚」を「宣威」とする。	17	雅樂真幢將是賁 ⁵⁴ 俟其惠
		16	三郎幢將獨孤咸真
		15	折衝將軍三郎幢將……………□
		14	三郎幢將拔拔去斤 三郎幢將……………□
		13	鷹揚 ⁵³ 將軍三郎幢將□□男……………□
		12	□威將軍三郎幢將……………□
		11	鷹揚將軍三郎……………□



32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21



57 張・李1997は「建」を「宣」とする。

21 雅樂真幢將步六

建威將軍雅樂

雅樂真幢

陵江將軍

威遠將軍

宣威將 宣威將 

揚武將軍

後軍將 

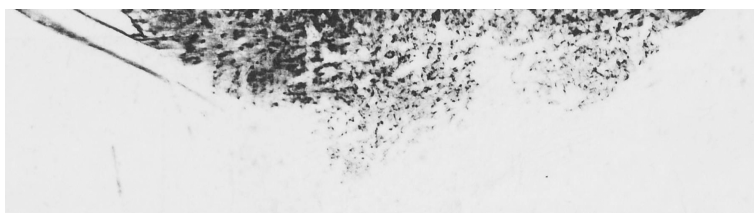
宣威 ☒

後軍

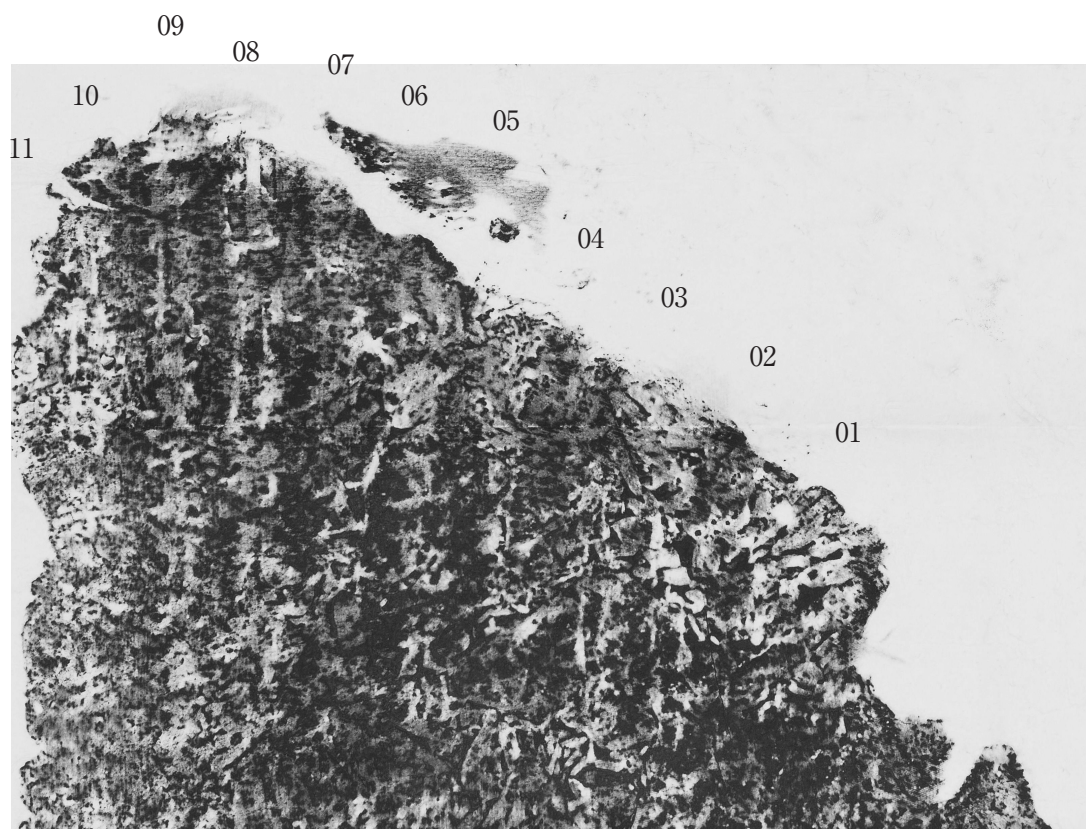
宣



05 04 03 02 01



05	04	03	02	01	第六列
	輕				





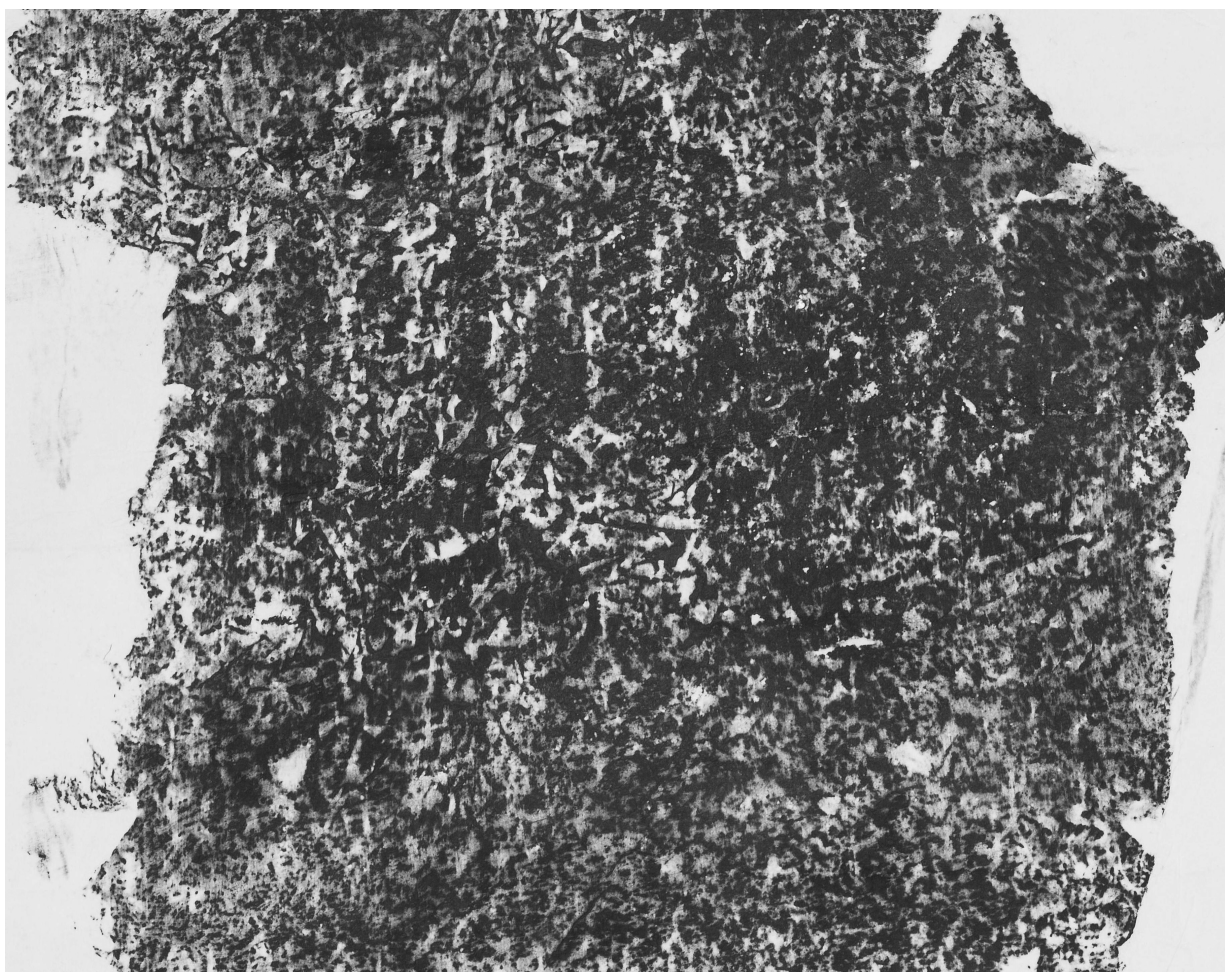
石塊第一列

11	10	09	08	07	06	05	04	03	02	01
☐ ⋮ ☐	☐三郎幢將樂洛生⁵⁹	☐三郎幢將☐子叱⁵⁸ ☐大食☐	☐☐三郎幢將張⋮	☐ ⋮子乙⋮	☐☐直懃乳樹	☐ ⋮⋮⋮	☐ ⋮⋮⋮	☐ ⋮⋮⋮	☐ ⋮⋮⋮	☐ ⋮

59	58
張・李 1997 は「樂」を「采」とする。	張・李 1997 は「叱」を「長」とする。



14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01





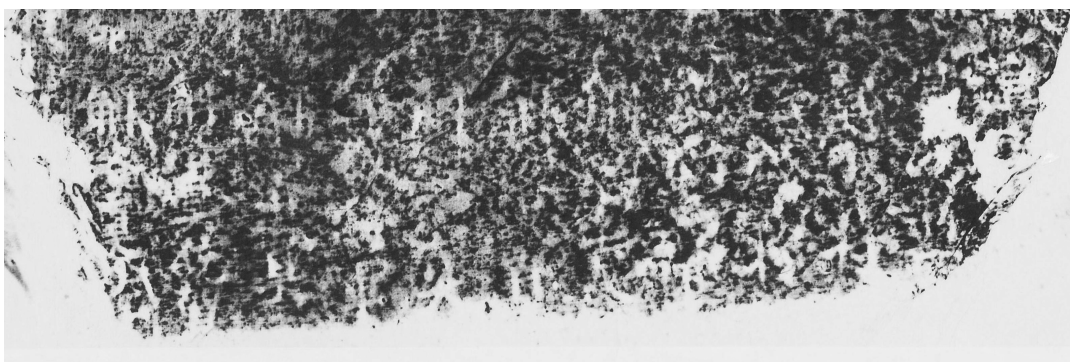
石塊第二列

01	□	………
02	………	
03	………	
04	………	
05	□ □將軍	………
06	□ □將軍	………
07	宣威將軍□令戶□引 ⁶⁰	………
08	□ □將軍	………
09	右軍將軍………城子于	………
10	後軍將軍………	………
11	宣威將軍………令	………
12	都長………杖庫令怡長命	………
13	建中將□	………
14	………□	………

60 張・李 1997 は「引」を「那」とする。

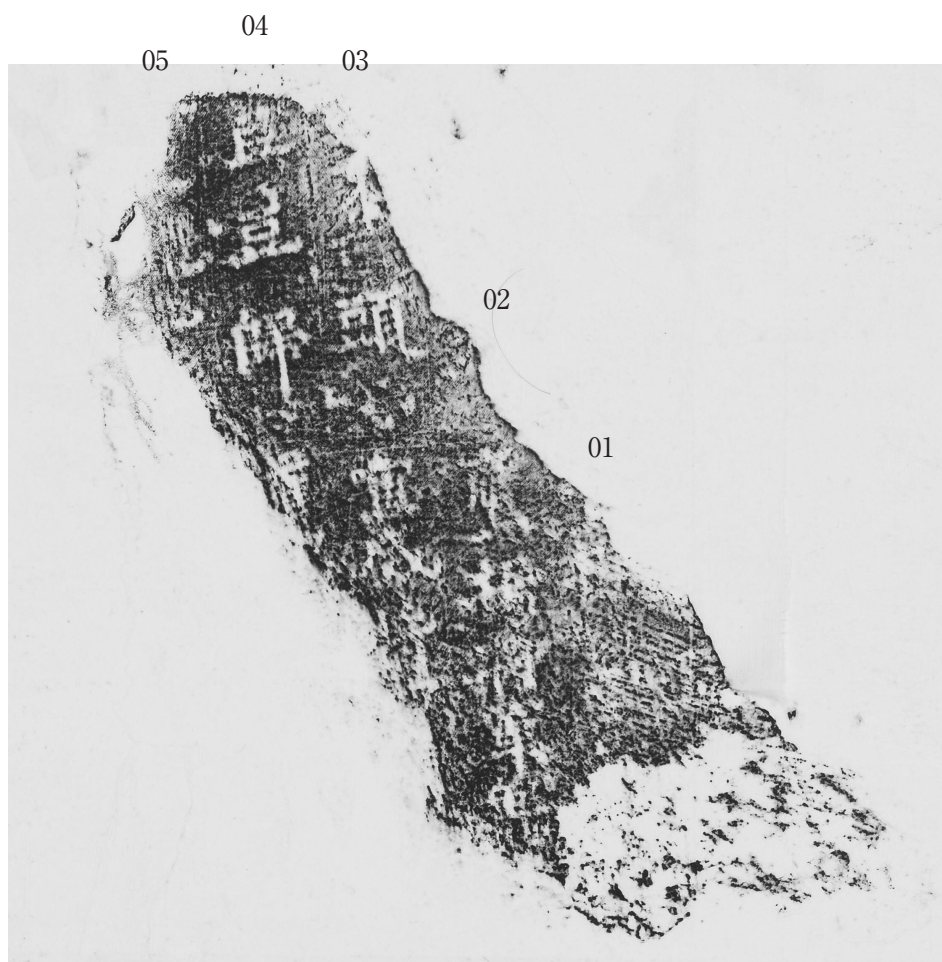


12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01





12	11	10	09	08	07	06	05	04	03	02	01	石塊第三列
斛洛真統	斛洛真統賀	斛洛真	威將軍	斛洛真	斛洛真	斛洛真	將軍	威將	將	將	...	
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	



小塊残石

05	04	03	02	01
☐ ☐ 禮 … ☐	☐ 豆 豆 歸 鷹 ☐	☐ 尔 頭 宣 威 將 ☐	☐ 鷹 揚 將 軍 ☐ ☐	☐ 揚 … … ☐

既刊：

- センター研究年報2010 特集 中国旅行雑誌（井波陵一編）
センター研究年報2013 特集 科学史研究室所蔵資料データベース（武田時昌編）
センター研究年報2015 特集 漢籍リポジトリ（ウィッテルン・クリスティアン編）
センター研究年報2016 特集 韓国の人名用漢字と漢字コード（安岡孝一・安岡素子編）
センター研究年報2017 特集 京都大学人文科学研究所蔵 龍門二十品拓本（稲本泰生・安岡素子編）
センター研究年報2018 特集 Universal Dependencies にもとづく古典中国語（漢文）の依存文法解析
（安岡孝一編）
センター研究年報2021 特集 秦簡牘通仮例（野原将揮編）

センター研究年報2022（不定期刊）

特集 北魏文成帝南巡碑陰図釈（藤井律之編）

発行日 2023年2月28日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

印刷所 共同印刷工業株式会社

